

しあわせの花

—鏡に表現される植物たち—

令和7年3月15日(土)～9月7日(日)



兵庫県立考古博物館 加西分館
古代鏡展示館
Hyogo Prefectural Museum of Ancient Bronze Mirrors

銅鏡の背面には様々な紋様が表されていますが、植物を表現した紋様は、戦国時代後期（紀元前3世紀）頃に登場します。隋唐時代の紀元後6～8世紀には、西・中央アジアに由来する植物をモチーフとした紋様が採用され、流行します。そこに表現されている植物は単に造形的な美を象徴するだけでなく、豊かさなどの幸福を鏡の所有者にもたらし意味が込められています。

神聖な花



れんじょうからこもんはつかきょう

蓮上唐子紋八花鏡 唐／径14.2cm【259】

蓮の葉を頭にかぶった童子が蓮花の上で踊るような姿で表され、子孫繁栄の意味が込められています。



蓮花はつぼみ、開花など様々な姿で表現されます



蓮花は、仏教では極楽浄土に咲く花として重要な意味をもち、また泥の中から美しい花を咲かせることから清廉や生命力の強さを象徴しました。中国では、漢時代には天の中心を象徴する高貴な花とされたほか、天上界に咲く花として多産を象徴するなどの幸福をもたらす花の祖形がすでにあったと考えられています。仏教が中国に伝来すると、様々な蓮花のイメージが融合します。神聖な花として人々に好まれ、唐時代に入ると銅鏡の紋様に多く用いられるようになりました。

空想の花



だんかもんきょう

団華紋鏡 隋一唐／径23.7cm【188】

団華紋とは空想上のおめでたい花を円形に図案化した紋様です。
細かな花紋が鏡背面全体に咲き誇ります。



団華紋



この団華紋のモデルは中央アジア由来の
チューリップと考えられます

唐時代には、様々な植物の紋様を組み合わせ、デザイン化した幸福をもたらす空想上の花の紋様が生み出されました。「宝相華紋」と呼ばれるこの紋様は、仏教の普及とともに同時期の建築や工芸品に装飾されるほか、銅鏡の紋様としても採用されています。また鏡背面には、通常の植物の紋様のほかに複数の花紋が組み合わされ、円形や多角形に図案化された「団華紋」としても表現されました。

豊穡の果実



かいじゅうぶどうきょう

海獣葡萄鏡 唐／径17.4cm【225】

シルクロードを通じて西アジアから伝わった
動植物を主題とした銅鏡。
唐時代初期に大流行し、日本にも伝えられます。



葡萄が生き茂る世界に獣たちが遊ぶ

西アジアを原産とする葡萄は、蔓をのぼし、房に多くの実がなることから、多産・豊穡・子孫繁栄を象徴する縁起のよい植物でした。唐時代には銅鏡の紋様として取り入れられ、唐草紋と組み合わされて「葡萄唐草紋」として、この時期を代表する植物紋様となりました。

多くの実を包むような形をする柘榴もまた葡萄と同様に多産を象徴し、幸福をもたらす意味が込められた植物紋様とされました。

花の写真：兵庫県立フラワーセンター提供